ウィキペディア
フリー百科事典

近藤勇

出典: フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』

近藤 勇（こんどう いさみ、天保5年10月9日〈1834年11月9日〉[2] 慶応4年4月25日〈1868年5月17日〉）は、江戸時代末期の武士。新選組局長。後に幕臣に取り立てられ、甲陽鎮撫隊隊長。勇は通称で、諱は**昌宜**（まさよし）。慶応4年（1868年）からは**大久保 剛**（おおくぼ たけし）を名乗り、後にさらに**大久保 大和**（おおくぼ やまと）と改めた。家紋は丸の内に三つ引。天然理心流四代目宗家。

近藤 勇　　**凡例**

国立国会図書館蔵（1866年撮影）

時代 [江戸時代末期（幕末）

生誕 天保5年[[10月9日 (旧暦)|10月9日(1834年11月9日）

死没 慶応4年4月25日（1868年5月17日）[1]

改名 宮川勝五郎（幼名）、勝太 → 嶋崎勝太 → 嶋崎勇 → 近藤勇

別名 大久保 剛→大久保 大和

戒名 貫天院殿純忠誠義大居士

墓所 下記参照

幕府 江戸幕府

主君 松平容保

藩 会津藩御預新選組局長、幕臣甲陽鎮撫隊隊長

氏族 宮川氏 → 嶋崎氏 → 近藤氏

父母 父：宮川久次郎、母：宮川みよ
養父：*近藤周斎*、養母：近藤ふで

兄弟 宮川リエ、宮川音五郎、宮川粂次郎

妻 松井つね

生涯

出生から試衛場入門

近藤勇の生家である宮川家は、享保年間（1716年–1736年）に上石原村北部で行われた新田開発に参加し、野川沿いへ移住したとされる。天保5年（1834年）、武蔵国多摩郡上石原村（現：東京都調布市野水）に百姓である父・宮川久次郎と母・みよの三男として生まれる[3]。幼名は**勝五郎**、後に勝太と改めた[3]。久次郎には勝五郎の他にも、長女・リエ（天保3年（1832年）に死去）、長男・音五郎（音次郎、乙五郎、源治郎）、次男・粂次郎（粂蔵、惣兵衛）と、祖父の源次郎がいた[4]。天保9年の上石原村の宗門人別改帳によれば、宮川家は多摩郡大沢村（三鷹市大沢）の龍源寺の檀家で、高七石一升二合の6人家族[5]であり、石高からして中流クラスの上層の家庭環境であったと判断される[4]。

嘉永元年（1848年）11月11日、勝五郎は江戸牛込（現：東京都新宿区市谷柳町）に所在する天然理心流剣術道場・試衛館に入門する。勝五郎が入門した道場は「試衛館」として知られるが、多摩郡蓮光寺村（現：多摩市連光寺）の名主・富沢政恕日記および小島鹿之助『両雄士伝』によれば「試衛」は号であり、「試衛場」と記されている[6]。

子	近藤たま、お勇、など

嘉永2年6月に目録を受ける[4]。同年10月19日に近藤周助（近藤周斎）の養子となり、周助の実家である嶋崎家へ養子入りし、**嶋崎勝太**と名乗る[4]。その後、**嶋崎勇**と名乗ったのちに、正式に近藤家と養子縁組し、**近藤勇**を名乗った。安政5年（1858年）には日野宿（日野市）の牛頭天王社（八坂神社）の奉納額に「島崎勇・藤原義武」と記されている[4]。

生家の隣にある近藤神社（東京都調布市野水）

万延元年（1860年）3月29日に御三卿・清水徳川家の家臣である松井八十五郎の長女である松井つねと結婚[7]。

翌年8月27日には府中六所宮で、天然理心流宗家四代目襲名披露の野試合を行い、晴れて流派一門の宗家を継ぎ、その重責を担うこととなった[7]。また、文久2年（1862年）には、つねとの間に長女・たまが誕生した。勇の死後、明治9年（1876年）に勇の長兄である音五郎の次男・勇五郎を近藤家の養子に迎え、娘・たまは勇五郎の妻となった[7]。

勇は天然理心流の門人同士で独自の交流を持ち、上京後も江戸や多摩の有力門人と書簡を介して交流し、金策の要請などを行っている[8]。

なかでも勇が密接に交流した人物に兄の音五郎や惣兵衛、寺尾安次郎、佐藤彦五郎、小島鹿之助、沖田林太郎、粕谷良循（出生名・土方大作。土方歳三の兄。墓石は糟谷表記）[9]。佐藤彦五郎は日野宿の名主で、天然理心流の門人となり屋敷内に稽古場も持っていた[10]。小島鹿之助も多摩郡小野路村（町田市）の名主の家庭に生まれ、同じく門人となり屋敷に道場を持っていた[11]。時期は不明であるが、勇、彦五郎、鹿之助の三人は『三国志演義』にならい義兄弟の契りを結んだという[11]。また、鹿之介は漢学を修める教養人で、勇への思想的影響があったともいわれる[11]。佐藤彦五郎や小島鹿之助は農兵隊を組織し、一部はのちに甲陽鎮撫隊と名を改めた新選組に合流した[11]。

浪士組参加から清河派との決裂

文久3年（1863年）正月、江戸幕府は旗本の松平忠敏、出羽国庄内藩出身の清河八郎の献策を受け入れ、14代将軍・徳川家茂の上洛警護をする浪士組織「浪士組」への参加者を募った[12]。永倉新八『新撰組顛末記』によれば、浪士募集を受け斎藤一を除く近藤ら試衛館の8人はこれに参加することを決める。正月16日に近藤は小野路村の小島家で鎖帷子を借りている[12]。2月8日、浪士組一行とともに京都に向けて出発した。一行は江戸小石川（東京都文京区）の伝通院を発して中山道を進み、子母澤寛『新選組始末記』によれば近藤は取締付・池田徳太郎の手伝役として道中の宿割りを命じられ、本隊より先行して出立したという[13]。また、『新撰組顛末記』では2月9日に本庄宿（埼玉県本庄市）に止宿した際に宿の手配に漏れが生じ、水戸藩の芹沢鴨が激怒して大かがり火を焚き、近藤と池田が詫びたとする逸話を伝えている[13]。一行は同年2月23日に京都に到着すると、壬生村（京都府京都市中京区）の民家や寺社に分宿した[13]。近藤は壬生村の郷士・八木源之丞邸や周辺の寺社に分宿した[13]。

一行が京都に到着した23日夜、清河は新徳寺（中京区）において浪士組上京の真の目的は朝廷に尊皇攘夷の志を建白することであると宣言し、浪士組の江戸帰還を提案した[13]。翌24日に清河は学習院国事参政掛に建白書を提出した[13]。これにより浪士組は清河ら江戸帰還派と近藤・芹沢ら京都残留派に分裂し、異議を唱えた近藤や芹沢ら24人は京に残留する[13]。文久3年3月の

近藤勇書簡によれば、近藤は清河と同じ尊皇攘夷派に属しつつも、清河が幕府よりも朝廷を優先する思想であるのに対し、近藤は朝廷と幕府を一体化させ政局を安定させる公武合体論的な思想であったことが指摘される[14]。

松平容保

壬生浪士組の発足と芹沢鴨暗殺

同年3月10日、二条城において京都守護職を務める会津藩主・松平容保は幕府老中から京都の治安維持のため浪士を差配することを命じられ、近藤・芹沢ら17名の京都残留組は会津藩に嘆願書を提出し、3月12日に受理され会津藩預かりとして将軍在京中の市中警護を担う「壬生浪士組」が結成された[15]。浪士組24名のうち試衛場出身者は近藤ら8名が占めている[16]。

結成当初の壬生浪士組は運営が円滑にいかず、近藤は3月25日に四条大橋（京都市下京区・東山区）において下総浪士の殿内義雄を暗殺した[17]。殿内らは幕府から伝達を受け浪士組の探索を行っていたが、殿内の暗殺、根岸友山の一派と粕谷新五郎は脱退し、阿比類鎖三郎は病死（暗殺説あり）し、家里次郎は切腹した。殿内派3人のグループはこれにより瓦解し、浪士組は近藤派と芹沢派5名の二派閥体制となった[17]

近藤勇

『世話集聞記』によれば、3月25日に近藤・芹沢ら浪士組は壬生屯所の裏手で狂言を見物し、この際にはすでに会津藩の手付金で揃いの羽織を着ていたという[18]。文久3年2月、将軍家茂の上洛に随行して上京していた井上源三郎の兄・井上松五郎は4月17日に壬生屯所で土方歳三・沖田総司・井上源三郎から「近藤天狗になり候」とする相談を受けている[19]。この「天狗」に関しては近藤の慢心とみる説と、天狗=水戸天狗党と解し芹沢鴨の同類と理解する説がある[19]。同年3月5日ごろには近藤、芹沢、新見らは隊内の法度を定めている[20]。

文久3年8月18日、長州藩を京都政局から排除するために中川宮朝彦親王（尹宮）、会津藩、薩摩藩主導の八月十八日の政変が起こると、壬生浪士組は御花畑門の警護担当となるが、目立った活躍もなく長州勢の残党狩りに出動する。その後、働きぶりが認められ、武家伝奏より「新選組（新撰組）」の隊名を下賜された。近藤・土方らはまず、副長の新見錦を自殺させた[21]。また、新見錦は水戸浪士新家粂太郎と同一人物で、長州で死亡したとする説も存在している[22]。9月13日には近藤の意に応じないとして田中伊織を暗殺した[23]。さらに9月16日に芹沢らを暗殺すると[24]、近藤勇主導の新体制が構築された。10月10日には祇園料亭「一力」（京都市東山区）」において会津藩が主催して諸藩を招いた集会が開かれ、近藤もこれに招かれている[25]。

このころに養父の近藤周斎の病状が悪化し、長兄の宮川音五郎から江戸帰還を求められているが、近藤は京の政情不安を理由にこれを断っている[26]。

池田屋事件と禁門の変における活動

八月十八日の政変により京都政局は公武合体派が掌握し、一橋慶喜・松平容保（会津藩主）・松平定敬（桑名藩主）の三者による「一会桑政権」が形成され、新選組はその一角を担った[27]。元治元年（1864年）正月15日には将軍徳川家茂が入京し二条城へ入った[28]。松平容保は陸軍総裁職・軍事総裁職となり、2月25日には福井藩主・松平慶永が京都守護職に就任している[29]。幕府では新選組を松平慶永に預ける案が浮上したが、近藤はこれを断っている[29]。5月7日に将軍家茂は江戸へ帰還するが、近藤は将軍の在留を求めて憤激する書簡を残している[30]。

同年5月末ごろ、近藤の養父周斎宛の書簡によれば、近藤は備中国松山藩主・板倉勝静の家来で新選組隊士の谷三十郎から弟の昌武（周平）を養子に迎えたことを伝えている[31]。なお、周平は慶応3年（1867年）に養子関係を解消し旧姓に戻り、翌年に江戸へ戻る途中で脱走している[32]。

元治元年6月1日、新選組は熊本藩士・宮部鼎蔵下僕である忠蔵を捕縛し、ほか不審者二名を捕縛した[32]。拷問により謀反の計画を知り、四条通小橋西入ル真町（京都市下京区）で薪炭商・枡屋喜右衛門（古高俊太郎）を捕縛した[33]。古高の供述から中川宮邸放火計画を知った新選組は直ちに探索を開始し、6月5日（1864年7月8日）に一味が潜伏していた池田屋に突入して宮部一派を壊滅させた（池田屋事件）。この働きにより、新選組は朝廷と幕府から感状と褒賞金を賜った。

禁門の変出動を経て、近藤は隊士募集のために帰郷する。ここで伊東甲子太郎ら新隊士の補充に成功した。

京都政局と近藤の広島出張

慶応元年（1865年）9月16日、将軍・徳川家茂は上洛して二条城に入り、9月21日には京都御所へ参内して長州再征の勅許を得る[34]。再征勅許の獲得により幕府では大目付・永井尚志を長州訊問使として派遣することを決定し、長州側との会見場所が安芸国広島の国泰寺（広島県広島市中区）に決定した[35]。近藤は会津藩を通じて訊問使への同行を願い出て許可された[35]。なお、同年11月4日付の佐藤彦五郎宛書簡では訊問使随行のことなどが記されているほか、天然理心流の後継者を沖田総司とすることなども記されている[36]。

近藤は武田観柳斎、伊東甲子太郎ら隊士8名とともに11月7日に大坂を立ち、11月16日に広島へ到着する[37]。11月20日に永井は近藤らを自らの家臣として長州派遣を要請するが長州側にこれを拒否され、さらに11月22日には永井は近藤らを長州側との折衝役とし、近藤らは長州藩側の宿舎に赴いているが面会を拒否されている[38]。近藤らは11月23日に長州藩士との面会を果たし、12月11日には長州入りを要請するが、再び拒否されている[39]。12月15日に近藤らは長州藩の支藩・岩国藩領の新湊（山口県岩国市新港町）において岩国藩との会談を要請するが、これも拒否されている[39]。近藤らは長州入りを断念し、12月22日に京都に帰還している[39]。

慶応2年（1866年）正月22日、幕府は長州藩に対する処分を決定し、老中・小笠原長行を広島へ派遣する[40]。正月27日に近藤は伊東、篠原泰之進、尾形俊太郎とともにこれに随行し、2月3日に広島へ到着した。2月16日に近藤は広島藩士と交流のある伊東を介して岩国藩士・塩谷鼎

助との会談を要請するが、これを拒否されている[40]。同年6月7日には第二次幕長戦争が勃発するが、7月20日に将軍家茂が大坂城で急死したため、8月21日に勅命で長州征伐が停止される[41]。

新選組の幕臣化と伊東甲子太郎の分離・暗殺

同年9月26日、伊東甲子太郎と篠原泰之進が近藤の妾宅を訪れ、近藤と時局を論じたという[42]。篠原の日記によれば伊東が勤王を説き孝明天皇（同年12月25日に死去）の衛士になることを主張したのに対し、近藤は徳川幕府の趨勢を論じ議論は平行線となり、近藤は伊東らの分離を警戒したという[42]。

慶応3年（1867年）正月18日、伊東らは九州遊説のため太宰府へ赴き、そのまま新選組から分離した御陵衛士（高台寺党）となった[43]。伊東らは3月12日に帰京、翌13日に近藤・土方らに分離を申し出て、了承された[43]。この際に藤堂平助・斎藤一（近藤派の間者との説あり）らがこれに加わった。

同年6月10日、新選組は会津藩預かりから隊士全員が幕臣となる[44]。近藤は御目見得以上の格（三百俵旗本）となる[44]。これにより近藤は幕府代表者の一員として各要人との交渉を行い、同年6月17日には幕府親藩の集会で演説を行っている[45]。近藤は征長論を主張し、6月24日には近藤の建白書が議奏の柳原前光、正親町三条実愛に提出される[46]。土佐藩士の日記によれば、この時期、近藤は永井尚志の紹介で土佐藩の参政である後藤象二郎を紹介され、さらに同年9月27日には岡山藩家老の日置帯刀を紹介され、長州征伐について会談したという[47]。同年6月15日には屯所を西本願寺から不動堂村（京都市下京区）に移転しており、新選組の任務には要人警護も加わった[48]。

同年8月8日には伊東ら御陵衛士も建白書を提出し、近藤の征長論に対し長州寛容論を主張した[49]。同年10月13日・14日に薩摩藩、長州藩に対して討幕の密勅が下ると、14日に将軍徳川慶喜は大政奉還を行いこれを回避する[50]。近藤は14日に正親町三条実愛を訪ね、大政奉還を尾張・越前の策謀として批判したという[50]。

同年10月18日夜、近藤は国事議論を目的に醒ケ井通木津屋橋（京都市下京区）に伊東甲子太郎を呼び、酒宴の後に七条油小路（下京区）において大石鍬次郎らに伊東を暗殺させた[51]。さらにほかの御陵衛士たちを誘い出して夜襲し、藤堂らを殺害した（油小路事件）[51]。

同年12月9日には王政復古の号令が発せされ、京都の旧幕府勢は撤退を命じられた[52]。新選組は将軍不在の二条城警護を命じられていたが、12月13日に近藤は水戸藩士と二条城警護をめぐり対立したという[53]。

12月18日、近藤は伏見の陣から二条城へ出向き、公卿らに薩長・尊王派を除こうと上京する[54]。篠原泰之進の日記によれば、御陵衛士の鈴木三樹三郎・篠原ら8名は竹田街道・墨染（京都市伏見区）において近藤を待ちぶせ、馬上の近藤を銃撃する[55]。近藤は肩を負傷し、島田魁日記によれば伏見城へ逃れたという[55]。近藤は新選組の検診医でもあった幕府典医・松本良順の治療を受けるため、沖田総司とともに大坂城で療養している[56]。

慶応4年（明治元年、1868年）1月3日には旧幕府軍と新政府軍の間で鳥羽・伏見の戦いが発生する。新選組は会津兵らと伏見奉行所におり、近藤負傷のため土方が隊を指揮した[57]。

戊辰戦争と甲陽鎮撫隊

錦絵「勝沼駅近藤勇驍勇之図」（月岡芳年画、1880年、東京都江戸東京博物館蔵）

鳥羽・伏見の戦いにおいて敗れた新選組は、幕府軍艦で江戸に戻る。近藤・土方は富士山丸に乗艦している。江戸鍛冶橋門外（東京都千代田区）の秋月種樹邸を屯所とする[58]。永倉新八「浪士文久報国記事」『新選組日記』によれば、近藤は江戸帰還後に徳川慶喜に対して甲斐国甲府の甲府城（山梨県甲府市）の委任を要請する建白書を提出した[58]。

2月28日、近藤は幕府から「甲陽鎮撫」を命じられ、幕府から武器弾薬を、幕府や会津藩から資金を与えられると3月、近藤は「**大久保剛**」の変名を用いて新選組は甲陽鎮撫隊と改名した[59]。また、日野宿では佐藤彦五郎が一行に加わっている[60]。一行は3月1日に江戸鍛冶橋屋敷を出立すると甲州街道を甲府へ出陣、途中、近藤の故郷である上石原宿に立ち寄り、西光寺向かいにあった名主・中村勘六の民家で歓待を受け、しばし休息した[61]。一方の新政府軍も岩倉具定が東山道先方総督軍を率いて信濃国諏訪から中山道・甲州街道に分かれて江戸へ進軍していた[60]。近藤は3月4日に花咲宿（山梨県大月市）において東山道先鋒総督参謀・板垣退助の率いる迅衝隊が甲府を制圧したことを知り[62]、3月6日に甲州市勝沼町において勃発した甲州勝沼の戦い（柏尾戦争）で迅衝隊と戦うが敗れて敗走する[63]。

幕府指示による五兵衛新田での待機と再編

近藤勇・土方歳三らは勝沼敗戦後、3月8日に八王子宿（東京都八王子市）へ退いた。永倉新八・原田左之助は甲陽鎮撫隊として勝沼の戦いまで近藤と行動を共にしたが、敗戦後は江戸へ戻り、3月11日に江戸和泉橋医学所で近藤と再会したとされる[64]。

近藤・土方は会津行きに備えて隊を再編成し、幕府陸軍隊長佐々井半十郎の指示により、3月13日から4月1日まで下総国葛飾郡五兵衛新田（現在の東京都足立区綾瀬付近）に滞在した。この滞在は佐々井が「大久保大和（近藤勇の別名）」宛に送った書状（金子家文書）により確認され、幕府の正式な待機命令であったことが裏付けられる。五兵衛新田の農家は幕府への忠誠心から新選組を支援し、金子家は屯所として隊士を受け入れた。旧幕府歩兵らの募集も行われ、隊士は227名に増加した。この期間に隊の再編と増員が進められ、流山への移動に際して近藤は金子家に自身の写真と金二千疋を渡したと伝えられている[65]。

江戸城無血開城と流山移動

3月14日、西郷隆盛と勝海舟が会談し、これに先立って山岡鉄舟が徳川慶喜の助命嘆願と江戸不戦開城の交渉を行った。こうした調整が進む中、旧幕府の武装勢力は新政府軍から武装解除と江戸退去を求められる立場となり、江戸市中にとどまることが困難になった。4月1日、近藤は五兵衛新田を出立し、下総国流山（千葉県流山市）へ移動した。流山へ移動した背景については諸説あり、旧幕府側が江戸城の無血開城に向けて新政府軍との衝突を避けるための措置であったと解釈されることもある。これは情勢判断によるもので、逃亡ではなく旧幕府方の再編行動の一環であったとされる[65]。

4月11日、西郷隆盛と勝海舟の会談を経た交渉の結果、江戸城は無血で明け渡された。これにより、江戸における旧幕府軍は武器・弾薬を新政府軍に引き渡し、事実上武装解除されることとなった[66]。

流山での屯集と捕縛

4月、新選組は下総国流山に屯集し、4月1日・2日には光明院・流山寺に分宿し、近藤・土方は長岡七郎兵衛宅を本陣としていた[67]。

一方、新政府軍は3月13日に板橋宿（東京都板橋区）へ進出し、総督内参謀の香川敬三が大軍監として日光街道を北上し、4月2日には糟壁（埼玉県春日部市）に到達していた[68]。

新政府軍は、流山に集結した新選組が旧幕府勢力と連携して行動する可能性を警戒し、4月3日に近藤勇を捕縛した。捕縛の経緯については史料により異なり、越谷の政府軍本営へ自ら出頭したとする記録も存在する[69]。

太政官日誌「慶応四年閏四月第十三」に記された、大久保大和（近藤勇）の流山での捕縛記事。

太政官日誌では、当初「賊長」を徳川慶喜としていたが、慶応4年閏4月以降の記事では近藤勇（大久保大和）を賊徒の首領として扱うようになっている。これは、新政府が旧幕府勢力の実質的な指揮者を近藤と認識し、処断の正当性を示すために賊長の位置づけを変更したと解釈されることがある。一方、新政府軍は3月13日に板橋宿（東京都板橋区）へ進出し、総督内参謀の香川敬三が大軍監として日光街道を北上し、4月2日には糟壁（埼玉県春日部市）に到達していた。新政府軍は、流山に集結した新選組が旧幕府勢力と連携して行動する可能性を警戒し、4月3日に近藤勇を捕縛した。捕縛の経緯については史料により異なり、越谷の政府軍本営へ自ら出頭したとする記録も存在する。太政官日誌では、当初「賊長」を徳川慶喜としていたが、慶応4年閏4月以降の記事では近藤勇（大久保大和）を賊徒の首領として扱うようになっている。これは、新政府が旧幕府勢力の実質的な指揮者を近藤と認識し、処断の正当性を示すために賊長の位置づけを変更したと解釈されることがある[70]。

板橋宿への移送と取り調べ

太政官日誌「慶応四年戊辰夏五月第一六」には、近藤勇の処刑に至る経緯が記録されている。

流山で捕縛された後、大久保大和（近藤勇）であることを知る者が新政府軍側にいたため、近藤は総督府が置かれた板橋宿へ移送された。近藤は板橋宿平尾の脇本陣豊田家に幽閉され、板橋宿本陣で連日取り調べを受けた。近藤は「大久保大和」と名乗っていたが、後年の伝承では、元隊士で御陵衛士だった加納鷲雄・清原清が正体を見破ったとされる。しかし、この説を裏付ける一次史料は確認されていない[71]。

板橋での処刑とその後

近藤の処遇については、後年の研究や小説などで「土佐藩（谷干城）と薩摩藩の間で意見が対立した」とする説もあるが、これを裏付ける一次史料は確認されていない。太政官日誌および東山道先鋒総督府の記録では、近藤の処刑は現地総督府（板垣退助ら）による軍事判断として

決定されたことが記されており、薩摩藩が処遇に関与したことを示す記録は残されていない[72]。

慶応4年4月25日（1868年5月17日）、近藤は中山道板橋宿近くの板橋刑場[注釈 1]で横倉喜三次・石原甚五郎によって斬首された（享年35）。

太政官日誌では近藤を「大和（大久保大和）」と記し、閏4月には「賊魁 近藤勇 事 大久保大和」、同年5月には「賊長 新選組 近藤勇 事 大和」と表記しており、新政府が近藤を重要人物として扱っていたことがうかがえる[73]。

首は京都三条河原で梟首されたが、その後の行方は確定していない。

太政官日誌に記された近藤勇処刑記事（前半）

太政官日誌に記された近藤勇処刑記事（後半）

墓所

龍源寺にある近藤勇の墓

- 東京都北区の板橋駅東口前の寿徳寺境外墓地（永倉新八により建立。処刑場の近隣）板橋刑場跡の近くに位置し、明治9年に永倉新八が発起人となり、旧幕府典医松本良順の協力を得て建立された「近藤勇と新選組隊士供養塔」がある。塔の側面には新選組に関わった110名の名が刻まれており、新選組最初期の供養塔として学術的価値が高く、北区指定文化財となっている。同じ区画には、永倉が建立した近藤勇の供養墓、永倉自身の墓（こちらの方が大きく目立つ）、土方歳三の慰霊碑、新撰組慰霊塔などが並んでいる。近藤の命日にあたる4月25日またはその直前の日曜日には、寿徳寺と「近藤勇と新選組隊士の墓保存会」によって墓前供養祭が例年行われている。
- 東京都三鷹市の龍源寺（上述の出身地、現：調布市野水のすぐ近く。）近藤勇の墓所。墓地に入ってすぐ右側に看板があり近藤一族の墓が5基並んでおり、右から2基目が近藤勇の墓（東京都指定文化財）。墓碑は近藤家の養子で甥にあたる近藤勇五郎によって建立された。境内には辞世の句碑もある。門前には近藤勇胸像がある。

- 福島県会津若松市の天寧寺 近藤勇の供養墓があり、遺体の一部が葬られたと伝えられている。天寧寺では毎年4月25日に近藤の追善供養の墓前祭が行われている。また、2020年には会津若松ライオンズクラブが60周年記念事業として、近藤勇の墓碑の隣に土方歳三の慰霊碑が建立された[74]。
- 山形県米沢市の高国寺（近藤の従兄弟・近藤金太郎が首をひそかに持ち帰り埋葬）
- 愛知県岡崎市の法蔵寺にも「近藤勇首塚」がある。

毎年、民間団体が近藤を弔うために「近藤勇忌」を流山市や会津若松などで行っている。

戒名は貫天院殿純忠誠義大居士。

辞世

辞世の句は漢詩（七言律詩）で作られており、この句が刻まれた句碑が龍源寺境内の墓所にある。

> 孤軍援絶作囚俘　顧念君恩涙更流
> 一片丹衷能殉節　睢陽千古是吾儔
>
> **（書き下し文）**
>
> 孤軍援（たす）け絶えて俘囚となる　顧みて君恩を思へば涙更に流る
> 一片の丹衷能（よ）く節に殉ず　睢陽は千古是れ吾が儔（ともがら）
>
> 靡他今日復何言　取義捨生吾所尊
> 快受電光三尺劒　只將一死報君恩
>
> **（書き下し文）**
>
> 他に靡き今日復（ま）た何をか言はん　義を取り生を捨つるは吾が尊ぶ所
> 快く受けん電光三尺の剣　只に一死をもって君恩に報いん

親族

- 実父：宮川久次郎
- 実母：宮川みよ
  - 姉：宮川リエ
  - 長兄：宮川音五郎（1830-1871）
    - 甥・婿養子：近藤勇五郎（1851-1933）勇の長兄である音五郎の次男で、勇の娘であるたまの夫。勇の刑死後、近藤家に婿入り[7]。

- 次兄：宮川粂次郎（1832-1875）
- **本人：宮川勝五郎**（1834-1868）近藤周斎に養子入りし、**「近藤勇」**となる。
- 正妻：松井つね（1837-1892）
  - 娘：近藤たま（1862-1886）勇の甥である勇五郎（勇の兄である音五郎の次男）の妻[7]。
    - 孫：近藤久太郎（1883-1905）勇五郎とたまの長男。日露戦争で戦死。これにより、勇の嫡流子孫は断絶した。
- 妾：駒野
  - 息子：のちに僧籍。
- 妾：お考
  - 娘：お勇
- 妾：およし
  - 息子：？

その他にも勇は朝鮮人貿易商との間に男子3人がおり、久太郎の他にも孫がいる。

宮川家は代々農家を続けており、現在の末裔も都内で農家を営んでいる。一族である宮川清蔵氏は天然理心流9代宗家となっている[75]。

逸話

- 源義経、楠木正成などの武将が登場する軍談を読み聞かせられて育った。特に三国志演義の関羽に憧れていたと伝わる。
- 加藤清正を尊敬し、同じく口から拳骨を出し入れできた加藤清正の真似をして「清正公のように出世したいものだ」と語ったという。
- 近藤の生家（現野川公園入口付近）は明治以降も現存していたが、太平洋戦争中の調布飛行場延長工事により取り壊され、井戸と近藤勇を祀った小さな神社がある。
- たまごふわふわと呼ばれる、静岡県袋井市の郷土料理を好んだとされることもあるが、それは大河ドラマ『新選組！』の近藤勇の設定であり史実の近藤勇の逸話ではない[76]。
- 平成23年（2011年）10月、頼山陽流の漢詩掛け軸が見つかり報道された。その句は「只應晦迹寓牆東、喋喋何隨世俗同。果識英雄心上事、不英雄處是英雄」である（画像 (http://www.jiji.com/news/photos/photo_news/images/450/view1492290.jpg)）。

  > 書き下せば「只だ應に迹を晦まして牆東に寓すべし、喋喋何ぞ世俗に隨って同じからん。果たして英雄の心の上の事を識らば、英雄ならざる處ぞ是れ英雄。」、現代語訳は、「ひたすら隠者生活を送るべきであり、喋喋と政治を議論する俗人と同じではない。もし英雄の心が理解されるならば、英雄らしからぬことこそ英雄（なのである）」となる[77]。

※脚注・参考文献一覧は省略しています。

出典：Wikipedia「近藤勇」（CC BY-SA 4.0）著者：ウィキペディアンコミュニティ
URL：https://ja.wikipedia.org/wiki/近藤勇